

日系ブラジル人の農業を副業とした定住支援について

農業部門 吾郷秀雄

1. はじめに

島根県内では近年、外国人住民数が大幅に増加して来ている。2019年7月に公表された総務省の「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数」（2019年1月1日現在）では、県内の外国住民数は8,875人で、対前年比の人口増加率は15.4%と全国1位である。これは県内企業の人手不足などを背景として、日系ブラジル人の派遣会社社員や、ベトナム人の技能実習生が増加したことが主な要因と考えられている¹⁾。

県内市町のトップは出雲市で、「市住民基本台帳、世帯人口表」（2020年9月末現在）によると、市内外国人数は4,541人で、うち日系ブラジル人が3,104人（68%）と大多数を占めている²⁾。

出雲市では近年の外国人住民の増加に伴い、日本人と外国人が同じ地域に共に暮らしていく上で、いくつかの課題が明らかになってきたため2016年6月、出雲市多文化共生推進プラン³⁾（以下、「プラン」という）を策定した。

プラン立案の背景としては「外国人住民を一時的な滞在者としてだけでなく共に暮らす地域住民として受け入れ、行政は地域と一緒にあって外国住民と連携して共に暮らしていくための礎を築くことが求められている」、と指摘している。プランには、これまでの「国際交流」や「国際協力」に加え、「多文化共生」をもう1つの柱として捉え、「互いの国籍や民族、文化の違いを尊重し、共に暮らす多文化共生のまち」を目指すべき将来像として、その具現化に向けての取組み方針が書かれている。

本稿では出雲市に暮らす日系ブラジル人が置かれている現状と課題を考えながら、その中で筆者が支援している「日系ブラジル人たちによる農業を副業とした定住化に向けた取り組み」を紹介し、その活動について考察する。

2. 日系ブラジル人と取り巻く環境

(1) 日系ブラジル人とは

日系ブラジル人とは、主に両親の一方もしくは両方が日本人にルーツを持つブラジル人を指す。1908年（明治41年）からの移民事業でブラジルに移り住んだ日本人とその子孫で、現在までの約100年間に13万人の日本人がブラジルに移住し、現在では約160万人の日系人が住むといわれている。

移民が始まった1908年は、日露戦争後の日本経済が疲弊し農村の貧しさが深刻になっていた時期であった。移民事業ではブラジルでの高待遇や高賃金をうたっていたが、実際には居住環境が悪く労働は過酷で、低賃金などの問題もあったため夜逃げする人も多く、また日本人移民に対する人種差別感情や、後年には日本人移民に対する排斥の動きもあった。

日本語会話能力については移民1世から2世、3世へと徐々に衰退し、3世になると日本語を話す人がほとんどいない状況である。

1970年（昭和45年）代後半以降のブラジルは経済が破綻し、世界有数の借金大国に

なった。一方で日本は、高度経済成長を達成した後の安定した経済状況による人手不足であったため、1990年（平成2年）に出入国管理法が改正され、原則として日系3世までとその家族が職種の制限なく就労できるようになり、国内で日系ブラジル人の数が急増した⁴⁾。

在留資格がある来日日系ブラジル人数は2007年（平成19年）の31万7千人をピークに、2014年（平成26年）では17万3千人まで減っている⁵⁾。

(2) 出雲市内で働く日系ブラジル人を取り巻く環境

○日系ブラジル人の働く環境

出雲市内の日系ブラジル人のほとんどは、市内の大手電子部品製造会社と契約する派遣会社の社員である。ここでの作業は、日系ブラジル人のグループ内で働き、生活面でも同じコミュニティ内で生活しているため、日本語を勉強する必要性が少なく、日本語が話せないため日本人との交流も少ないという実態である。

市内の日系ブラジル人は学力が高い人もいるが、日本語が話せないという理由でそれらの資格を活かすことができず、地元での再就職は難しい状況である。

日系ブラジル人の雇用環境は、昨年からはまった中国と米国の経済対立などによる経済の減速から、派遣止めや労働時間削減による給与の減少などが発生し、不安定な状況になっている。

○NHKでの「山陰スペシャル・翻弄されて」の放映

NHK松江支局では2019年（令和元年）9月頃から、前述のような日系ブラジル人を取り巻く難しい雇用環境を明らかにしようと取材を開始し、2020年（令和2年）5月8日に「山陰スペシャル・翻弄されて」（30分）として放映した。その概要は次のとおりである。

2019年の夏ごろ、日系ブラジル人E氏が派遣会社から雇用止めされ、次の仕事を探していた。農業に興味があったため、日系ブラジル人のリーダー的なS氏と一緒に市役所を訪れて就農の可能性を探ったが、英語は話せるものの日本語が話せなかったことから、就職はかなわなかった。

前年に斐川町内に新築の家を購入し、家族も出雲市に親しみを抱き定住を希望していたが、就職ができなかったため、最終的には悲しみの中でブラジルに帰国することになった。E氏を出雲空港まで見送った前述のS氏は、「必要な時にブラジルから人を連れてきて、いらなくなると切り捨てるという“使い捨てにされた”ように感じているブラジル人も多い」とその残念な想いを語った。

S氏は雇用不安の状況は今後も続くと考えて、日系ブラジル人の中で農業に興味がある人たちに副業の機会を与えるために先頭になって農地を探し、平田地区の筆者の畑で古いトラクターを使いながら耕作を始めた。

○出雲市による日系ブラジル人へのアンケート調査

出雲市は2020年5月に、出雲市ブラジル人住民アンケート調査結果報告書(概要版)⁶⁾を発表した。2591人に送付し、467人（18%）から回答を得た。

それによると、出雲市での「定住志向を持つ人」が約3割いる一方、「わからない」と答えた人が約3割あった。「転職・就職を考えていない」が約6割である一方、「出雲市

内・市外での転職・就職を考えている」が約 37%である。

市では「今後の市内居住を未定としている人たちに、市内で永住してもらえるかが課題である」としている。

3. 設立された団体「イズモ・アグロブラジル」の概要

(1) 筆者が関わるまでの段階

前述のように 2019 年の夏ごろ E さんが派遣会社を雇い止めされ、次の仕事を探したが、日本語が使えなかったことから就職はかなわなかった。

その後の 2019 年 9 月頃、E 氏と S 氏は市内の市民農園（30m²）を借りて、古里の味であるブラジル野菜を植えた。しかし、市民農園では「ブラジル野菜の栽培はダメ」と言われ、植え付けたケールを抜き取られてしまった。また「生産物の販売はいけない」と言われたという。これは日本語の理解力の問題で、実際には「ブラジル野菜の栽培指導はできないこと、市民農園では販売するほどの量も採れない」という意味だったらしいが、野菜を引き抜かれたために、彼らは非常にショックを受けた。

S 氏は今後も日系ブラジル人の雇用不安は続くと考え、「副業としてブラジル野菜を栽培・販売して収入を増加させ定住化を応援したい」と考え、日系ブラジル人の中で農作業に興味がある人たちと一緒に、本格的なブラジル野菜栽培のために農地探しを開始した。その経緯は次のとおりである。

- ・ 市農業振興課を訪問して、市民農園規模より大きい農地の斡旋を依頼したが、難しいとの回答であった。次に友人のつてを使って探したが、「外国人には土地が貸せない、農地を貸すと隣人から文句が出る」などという意見が多く、なかなか貸し手が見つからなかった。
- ・ 2019 年 10 月中旬に廻りまわって最終的に筆者に相談があった。筆者は以前、国際連合食料農業機関（FAO）ラテンアメリカ事務所勤務時代にブラジル国を担当していたこともあり、喜んで自分の農地を貸し出すことを了承した。しかし彼らは農機具を保有していないため、ブラジル野菜のキャッサバ芋やフェジョン豆などの栽培を、どのように行うのかが分からなかった。このため、初年度は貸し出し面積を 120m² 程度の小面積とし、栽培が順調にできれば貸し出し面積を増やすことにした。なお貸した農地は、出雲市中心部の S 氏の自宅から車で 30 分以上もかかる遠地であるのが問題であった。なおキャッサバ芋はブラジルの代表的な「故郷の味」で、タピオカの原料である。
- ・ また貸し付けに当たり、植物防疫法に抵触しないよう「ブラジルから種苗の直接持ち込みなどは絶対にしない」ように確約してもらった。

(2) 筆者が関わった農業を副業とした定住化への取り組み

2020 年（令和 2 年）の春になり 4 月中旬、筆者の農地で彼らの農作業が始まった。作業に対して、筆者は自分の農業機械などを貸し出さなかった。貸し出せば、筆者への依存性が高まり持続性が問題となることを心配したためであった。

初日は鍬で耕起を始めたが、粘土質のため重労働で仕事はかどらなかつた。

それから 1 週間後、突然、NHK 関係者が我が家を訪れ「ブラジル人に農地を貸したそ

うですが、取材をさせてください」と言って来た。農地を貸した理由を説明し、NHKの人たちと一緒に S 氏の到着を待っていると、前日に購入したばかりという中古のオンボロトラクターで現れ、その耕起作業が撮影された。このトラクターでの耕起作業を見て、筆者は「本気で農業をやる考えだな!」と感じた。

その後、日系ブラジル人 P 氏の地元就職先の上司から、大社町杵築の耕作放棄地の幹旋(2か所約 800m²)があり、耕作できる農地が増加した。しかし、これらの土地は直径 10 cm 程度もある木が何本も生え、カヤが一面覆っていた条件が悪い放棄地であったため、S 氏は仲間と一生懸命に働き伐根して耕地を再生した。



写真：伐開前と伐開後の農地の状況

同年 5 月に、これらの土地にキャッサバ芋やフェジョン豆の植え付けができた。農作業には、協力者が 4 人いたことから、筆者はメンバーがバラバラではなく、団体を立ち上げて活動をしたらどうかと提案した。

(3) ブラジル農業チャレンジプロジェクトの概要

団体として活動するためには、団体の目的や活動内容、規約などの作成が必要であるため、2020 年 5 月と 6 月の 2 回に亘って WS (ワークショップ) を開催して内容を検討した。同年 6 月 5 日に、次のような「ブラジル農業チャレンジプロジェクト」(以下、「プロジェクト」という)と任意団体「イズモ・アグロブラジル」(以下、「団体」という)が設立された。団体の代表は S 氏に、副代表は P 氏に決まった。

プロジェクトは 10 年後の将来ビジョンを目指しながら、まずは 5 年間の試験的な事業から開始するとし、具体的には次のような内容である。

○将来ビジョン(10 年後: 2020~2029 年)の目標

農業に興味がある日系ブラジル人たちが、営農や加工・販売技術の確立、地元住民との信頼関係の構築により、「半農半 X」方式で出雲に安心して定住できること。

○「試験的事業」(5 年間: 2020~2024 年)の事業計画

5 年間の試験的プロジェクトの概要は次のとおりである。

- ・ 目標: 日系ブラジル人と日本人の協働により農業の試験的事業が実施され、日系ブラジル人が「半農半 X」方式で定住化への見通しが明らかになること。
- ・ 指標: 日系ブラジル人参加人数 20 人、栽培面積 5 ha

○試験的事業(5 年間)の成果と必要な活動

5 年間の目標を達成するための 3 つの期待される成果と各々の活動概要は、次のとおりである。

成果 1: 農業をするための農地が確保され栽培技術が確立できて確実に収穫できる。

活動概要

- ① 農地を確保し、市で農業経営基盤強化促進法による利用権設定の手続きをする。
- ② 農機具などの設備投資を行い、農地を整備する。
- ③ ブラジル作物の栽培方法や土地生産性を調査する。

成果2：農産物の販売先確保や加工方法の開発が行われ収益が明らかにされる。

活動概要

- ① 野菜の販売先・取り扱い店舗を確保する。(対象はブラジル人と日本人)
- ② 地域の高校・大学などと一緒にブラジル野菜を使った加工品開発(機能性調査含む)に取り組む。
- ③ ブラジル野菜の調理教室を開催し、地域住民にレシピを示して野菜販売をする。

成果3：日系ブラジル人と地元住民の交流が盛んになり地域から受け入れられる。

活動概要

- ① 地域の共同作業に参加するなどにより周辺農家から信頼を得る。
- ② 日系ブラジル人に啓蒙してプロジェクトへの参加者を増やす。
- ③ 地域や学校などに出かけてブラジル食文化や移民の歴史を伝える異文化交流を積極的に行う。

4. ブラジル農業チャレンジプロジェクトの現在までの活動

(1) 成果1: 農地確保などに関して

○本格的な農地確保

プロジェクトと団体」の計画書などができ、初年度の目標として約1haの農地確保が必要だったため、市担当課にそれらの計画書の説明と農地斡旋の依頼を行った。しかし、「JAに行行って聞いて欲しい」、JAでは「市に聞いて欲しい」とたらい回しにされ、結局、市から「農地の斡旋はできない」と言われた。

出雲市では「多文化共生プラン」があるため、積極的に支援が得られると思っていたが、残念ながら農地の確保ができなかった。

行政からの支援が受けられないため困り、友人を頼って農地の確保をお願いすることにした。キャッサバ芋は湿害に非常に弱いため、水田ではなく、排水が良い砂地の畑地を確保するのが良いと考えた。また、管理がしやすい住居近くが良いため今市から近い大社地域をターゲットとして、大社の友人に農地の紹介を依頼した。

7月になって、耕作放棄地の農地を貸してくれる4人を紹介された。この地域は、砂地で排水性が良く灌漑施設も整備されている。昔は葉タバコの生産が盛んで、その後はハウズドゥの一大産地であったが、現在は後継者不足からたくさんの耕作放棄地が見られ、場所によっては多くの樹木が茂っている土地もある。

紹介があった農地は合計約1haで、条件は農地利用代金が無料で灌漑用水代金だけである。地主の皆さんは、異口同音に「年寄りで草刈りが大変で困っていた。都会に住んでおり草刈り目的のためだけに毎月帰郷していた。借りてもらえるとありがたい」と話された。

また近所で問題とならないように、周辺の2町の町内会長さんにご挨拶と団体の説明をし、理解を得るようにした。

○農地管理や栽培管理

7月に確保できた農地では、キャッサバの作付けが遅れてしまったので、フェジョン豆などの栽培を考え、草が茂っていた農地を耕して播種した。

農地の管理方法は、S代表が団体保有の農業機械を使って耕起を行い、その後の栽培管理は各メンバーが行う方法である。

S代表は、ブラジルで500haの農地を保有し大豆や綿花の栽培経験があり、出雲市内では食堂を経営して比較的時間が取りやすい環境にある。一方、他のメンバーは全て会社勤めであるため、勤務後や休日にしか栽培管理を行えないという制約がある。このためS代表はボランティアでメンバーの圃場を毎日のように巡回し、管理が不十分な圃場に対しては、灌水作業などの支援を行っている。

9月の台風通過時には海からの潮風により、フェジョン豆の葉の一部が枯れる塩害問題が発生したが、大きな問題にはならなかった。

(2) 成果2: 収穫物販売などに関して

○ 収穫物の販売

栽培されたキャッサバやフェジョン豆、ケール、ブラジルナス、クレソンなどは、ブラジル人がよく訪れるスーパーや市内のブラジルレストランへ販売しているが、今のところ販売量はわずかである。



左) 収穫されたキャッサバ芋、右) おいしいキャッサバ芋の素揚げ

○ 食品レシピの開発など (予定)

- ・ 出雲農林高校との連携による食品開発：2021年の春から高校の地域連携プログラムの中の「課題研究授業」で、高校生によりブラジル野菜のレシピ開発などが実施される予定である。
- ・ 機能分析：県内の大学あるいは分析機関に、機能分析を依頼する予定である。

(3) 成果3: 地元住民との異文化交流に関して

団体の大きな柱である異文化交流活動は、次のように進めている。

○ 出雲高校生との交流会 (10月)

出雲高校2年生の5人が、文化交流(国際理解)の課題研究として「ブラジル料理と日本料理の違いを比較研究することを通して、日本に住むブラジル人の口に合う料理を提案したい」との交流申し込みがあった。

このため前述のNHK放映ビデオを見てもらった後で、ブラジル料理を食べてもらいながら交流を実施した。

○ 地元コミュニティセンターでの交流会 (11月)

団体の圃場がある所在コミセンで、団体主催の交流会を実施し、地域住民9人の参加

があった。まず、NHK 放映ビデオを見てもらい、その後にブラジルへの移民の歴史やブラジルの生活を説明した後、団体の取り組みについて説明した。その後でキャッサバスープなどのブラジル料理を試食してもらい、交流した。

○市内地区社会福祉協議との交流（11月）

市内の日系ブラジル人が多く住む Y 地区社会協議会主催による交流会が、11月に開催された。交流会には地区住民 26 人が参加し、ブラジル野菜の栽培状況を圃場で見学した後に、キャッサバ芋料理などを試食してもらい交流を深めた。

なお、これらの異文化交流の中で実施したブラジル料理の試食結果はおおむね好評で、ブラジル料理が日本人にも受け入れられそうだと感じている。

5. その他の活動など

(1) 筆者などの支援活動

筆者はブラジルを含めたラテンアメリカ地域で 15 年以上の長期にわたり国際技術協力を経験したきたため、彼らの言葉や文化などを理解できることから、この支援活動は今までの海外技術協力の継続のように感じている。

具体的な支援内容は、組織作りのための WS 開催やファシリテーター、計画のとりまとめ、農地の現地調査、地主との交渉、土地改良区との連絡調整、困りごと相談などである。

また別の日本人 1 人が総務担当として、農業委員会への書類関係、後述の（公財）ふるさと島根定住財団の補助金関係、異文化交流、会計などの支援をしている。

(2) 課題発生とその対策支援

○誓約書の作成

団体メンバーの中で些細ないがみ合いなどが発生したため、S 代表からプロジェクトメンバーが連携して活動するためのルールを作りたいとの要望を受け、団体入会のための宣誓書を作成した。そこには全員が協力して活動をするチーム力の重要性和、仲間としての約束ごと、植物防疫法を守ることなどを記述した。防疫法関連では、種苗や農薬は国内で販売されているものだけを使用し、絶対に直接輸入品は使用しないことを明記した。その後、ポルトガル語に翻訳してもらい徹底を図った。

○加工事業の範囲についての議論

団体の活動範囲は農産加工を含むとしていたが、活動が進んでくると加工分野の理解がメンバーの中で異なり、意見対立があった。加工事業を行うには、加工所建設や保健所の許可が必要で多額の予算が必要であること、ほとんどのメンバーは会社勤務で加工業に専念できないため責任やリスクは負えないことなどの理由によるものであった。最終的には WS を実施して議論し、加工事業や加工品事業は団体の事業ではなく、メンバーの個人的事業として実施することになった。

(3) 公的補助の受領

プロジェクトを成功裏に結びつけるため、農業機械や種苗などへの支援を（公財）ふるさと島根定住財団に助成金事業に申請したところ、7月に助成されることが決まった。こ

れにより、活動に弾みがついた。

6. 現在までの活動についての考察(2020年11月末)

(1) 日系ブラジル人に対する地元民の態度や言葉

○農地の確保や農作業上のトラブル

農地を貸したい地主さんと一緒に対象農地の現地調査に行ったところ、近くにいた隣人が「あんたたち外人には絶対土地はかさぞ！」と大声で叫んで、嫌がらせをする人がいた。一方、協力的な人たちもいる。「畑の一部を駐車場に使ってもいい」とか、「頑張れよ！」「畑を貸してもいいよ」と応援の声をかけてくれる場合もある。

唯一、隣接地とトラブルになったケースがあった。S氏の畑の隣接地の灌漑水栓の使用について、無断で少しの水を使用したところ、地主から「勝手にいじるな！」と叱責を受けた。「水栓がほとんど使われていないし、ちょっと使っただけ」だったらしいが、外国人ということで特別に厳しい対応があったようである。

なお「外国人扱い」については、日本人がブラジルへ移住した際には「ブラジル人から外国人として偏見の扱いを受け」、また先祖のふるさとの日本でも、前述のように「外国人として偏見の扱い」を受けている。日本と関りが強い日系ブラジル人であるため、もう少し暖かい対応をしてもらいたいと思っている。

○NHK放送や新聞報道の効果

NHKスペシャルの番組が地元で放映された後、全国放送もされた。テレビ放映の効果は絶大で、地元ではS氏に対して「テレビを見たよ、頑張れよ！」という励ましの言葉もあったし、全国放送の後から静岡と徳之島からブラジル野菜購入や販売について話があった。

またキャッサバ芋の収穫状況や地元民との交流会などが、地元のNHKテレビや新聞で何度も報道されているため、団体の活動はだんだん周知されて来ている。

(2) 農地確保や生産性、日系ブラジル人の参加人数

○農地の確保

農地確保については、残念ながら行政支援は得られなかったが、友人たちの協力により1年目の目標であった約1haに達した。これは、これらの農地が地主の居住地から1km程度離れた出作地であったことと、家が少なく耕作放棄地が集中している場所が確保できたことも幸いしたと考えられる。居住地の近くの農地では「自宅のものがなくなったらどうしよう」とか「隣人から批判を受ける」などの心配声が聞かれるが、家が少ない農地だけの場所であったため、貸し手にとってそれらの心配が少なかったと考えられる。

今まで草木が繁茂していた土地が、団体の取り組みにより整然と栽培管理されているため、今後は周辺の耕作放棄農家から「借りて欲しい」という要望が増えてくると考えられる。

この地区の農業基盤の問題点としては、農道が整備されていない上、一部私道を通らなければならないことである。農地の場所は大社町に位置し、地主は旧出雲市内の方々であったために、大社町時代には農地整備の優先順位が低く、整備されなかったとのことである。このため農道幅が2mと非常に狭くほとんどが未舗装で、また約80m区間は私道を

通過するため、通行料を支払わなければならない。

○日系ブラジル人の参加人数

当初は5人であったが11月時点の参加表明人数は、12人と目標の約半分に到達した。これは日系ブラジル人の中で農家出身者や農業に興味がある人がかなりの人数おり、彼らが団体管理の圃場で立派に育っているブラジル野菜を見て、「自分でもできそうだ」「自分も栽培してみたい」という気持ちが高まったことによるものと考えられる。今後とも、参加人数が増加することが考えられる。

○ブラジル野菜の生産性評価

キャッサバ芋の収量は、一般に1株当たり5~10kg、10アールあたり1トンから2トンといわれるが、今年の収穫量は多い株で4kg、低い株で約2kgであった。この原因は、通常4月植え付けであるが圃場準備の遅れから5月上旬になったことと、住宅地の横だったため日当たりが悪かったこと、また確保した圃場が小さく株ごとの間隔も十分と取れない状態であったことにあると考えられる。来年は、栽培面積を増加させ、最良の条件で試験を継続する予定である。

フェジョン豆については現在、坪刈りをして調査中である。台風時の塩害で葉が焼ける被害が出たが、見た感じではまあまあの収穫量だと思える。なおブラジルのフェジョン豆は「つる」は伸びないが、なぜかここでは隣の豆と絡み合うように「つる」が出る。このため、収穫時の労力が増加している。

その他のブラジルの葉物野菜については、ブラジルで農業経験があるA氏が立派な野菜を栽培しスーパーなどに販売しているため、出雲での栽培上の問題ないと考えている。

(3) 経済効果などの効果

○農業の経済効果

経済効果を判断するのはまだ早いですが、目安は出てきた。10アール当たり年間、粗放で連作栽培できるキャッサバで約30万円（収量約1トン）、間作のフェジョン豆やトウモロコシなどで20万円、合計50万円が当面の目標である。今年の収穫量から判断して、5年後には達成できる可能性が高いと感じている。

現在は1人当たり面積10アールで栽培を実施しているが、将来的には20アールを目標にしている。ただし、全体の栽培面積が大きくなると収穫量が増加し、販売先の確保が問題になって来るため、日系ブラジル人だけでなく日本人にもブラジル野菜を販売できるかが課題になってくる。

○耕作放棄地の減少効果

政府では耕作放棄地の解消に取り組んでいるため、小さな面積であるが、改善に貢献しているといえる。

(4) 持続性に対する検討

栽培管理の方法は前述のように、各メンバーが会社勤務の合間に栽培を行い、水管理などの不足部分をS代表がボランティアで支援している。次年度も、この方法で活動を続けたいと考えている。

しかしS氏は66歳であるため、今後は各圃場担当メンバーがS代表の支援がなくて

も1人立ちできるように支援することが重要であると考えている。

7. まとめ

出雲市内の日系ブラジル人の置かれている環境やニーズ、そこから農業を副業とした定住への取り組みと現状について述べた。

農地確保については、行政からの支援は難しい状況であるが、自分たちでなんとか道を切り開き少し目標が見えて来ている。

地元の受け入れについては、一部の住民から嫌がらせの言葉もあったが、全体的には協力的だと感じている。これにはテレビ放送や新聞の報道、さらにはブラジル料理を交えた交流会を開催していることが効果を発揮していると考えられる。

当初のプロジェクト参加人数は5人で、今年確保できた農地面積は約1haであった。来年は15人程度の参加数と、農地面積2ha程度を考えている。今年は農地確保が遅れ適期の播種ができなかったが、来年は理想的な栽培条件で試験ができると考えている。

日本では温暖化の影響から近年、暑すぎる気温が問題になり、従来からの農作物栽培に悪影響が出ているが、一方、ブラジル野菜などは高温を好む作物が多いことから、今後は日本での生産に合っていると考えている。来年は、ハウスを活用した熱帯果樹などにも取り組み予定である。

日本人の支援者は現在、2人と少ないため、今後は近くの大学生との連携も視野に考えている。

今後とも農業支援と異文化交流を実施して、地元を受け入れてもらえるような団体になるよう支援していきたい。それが定住化への近道だと考えている。

引用文献

- 1) 令和元年度島根県外国人住民実態調査等報告書：島根県環境生活部文化国際課、2019年10月
- 2) 出雲市地区別・町別・国籍別人口、令和2年9月30日
- 3) 出雲市多文化共生推進プラン（平成28年度～平成32年度）、出雲市、平成28年6月
- 4) 日系ブラジル人とは。コトバンク 2015-12-01 朝日新聞 夕刊
- 5) 在日ブラジル人とは、ウィキペディア
- 6) 出雲市ブラジル人住民アンケート調査結果報告書(概要版)、2020年5月